

発行○平成10年2月1日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
〒850-8570 長崎市江戸町2-13
(長崎県原爆被爆者対策課内)
Tel・Fax 095-823-4278

ヒバクシャ医療の「今」を発信する
なにしむ
NASHIM
ヒバクシャ医療国際協力通信

第2回
「永井隆」
平和記念・長崎賞
受賞者決定

What's Takashi Nagai peace memorial Nagasaki prize
第2回「永井隆」平和記念・長崎賞受賞者決定

New professor

新任教授紹介!!長崎大学医学部内科学第一講座 江口勝美

Reports

在外被爆者渡日治療の実施

Doctor's Works 核戦争防止国際医師会議(IPPNW)
第1回北アジア会議 長崎で開催

Letter Box [ロシア生まれの私は、ニュージーランドと長崎で
改めて核の脅威を知りました。]

Display

原研(原爆後障害医療研究)2号館のご案内



サイム バルムハノフ氏

受賞者

サイム バルムハノフ氏(75歳)

主な経歴

- 1922年9月20日
カザフスタン共和国アルマトイにて生まれる
- 1943年7月
国立カザフスタン医科大学卒業
- 1954年～60年
アルマトイ医科大学放射線医学教授
- 1957年～62年
職業病学教授兼任
- 1957年～62年
アチャバロフ教授らとセミバラチンスクにおいて
住民の核実験による影響を調査、「中部カザフス
タンにおける環境放射能と住民及び家畜の健康状態」
を報告
- 1962年～68年
カザフスタン共和国放射線腫瘍医学研究所副所長
- 1969年～(現在)
同所長
- 1996年～(現在)
カザフスタン共和国医学アカデミー名誉所長

[受賞]

- 1997年9月
カザフスタン共和国保健省及び科学技術省より
カザフスタン共和国功労賞受賞

「永井隆」平和記念・長崎賞 授賞式 日 時 ■平成10年3月3日(火) 15:00～
場 所 ■長崎県医師会館



永井 隆 (ながいたかし)
 明治41年(1908)
 ~昭和26年(1951)
 医師、原爆作家。
 島根県松江市生まれ。



昭和7年(1932)長崎医科大学を卒業し助手として放射線医学を専攻した。満州事変に幹部候補生として出征し、帰還してカトリックの洗礼を受け森山緑と結婚。日中戦争に軍医中尉として中国各地に転戦し昭和15年(1940)帰還した。同年、長崎医科大学助教授・物理的療法科部長となるが白血病に冒され、昭和20年(1945)6月、余命3年と診断される。同年8月9日爆心地から700m離れた同大学で勤務中原爆に遭い重傷を負う。この時出血がひどく、丘の上で同僚の外科の教授から手術してもらったが、麻酔なしの手術に顔色ひとつ変えない永井博士は実に神々しい気高い姿だったという。手術後、永井博士は自ら先頭に立って多数の傷ついた人々のため救護活動に挺身した。8月9日妻・緑は自宅の下敷きとなり逃げ出しきれず焼死した。子供2人は三ツ山の祖母の家に疎開中だったため無事だった。

翌昭和21年教授になったが白血病で倒れ、病床で原爆の手記を執筆し始める。これを「東京タイムズ」に発表して認められ、「ロザリオの鎖」「この子を残して」「生命の河」「長崎の鐘」「花咲く丘」「いとし子よ」など数々の作品を書き、祈りと平和を訴え続けた。これら著作を読んで感動した多くの人達が見舞いのため博士を訪問した。天皇陛下のお見舞いを受けローマ教皇も特使を派遣し、昭和23年にはヘレン・ケラーも訪問した。長崎市名誉市民第1号に選ばれ国会でも表彰を受ける。松竹映画「長崎の鐘」(昭和25年)は博士の住まいであった「如己堂」で撮影されたもので、多くの国民に感動を与えた。

昭和26年(1951)5月1日長崎大学医学部付属病院で骨髄性白血病により死去、5月14日に長崎市葬が行われた。

**「永井 隆」平和記念・長崎賞は、
 原子爆弾による被爆者と放射線被曝事故等による
 被災者に対する治療及び調査・研究等の分野において、
 ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じ
 世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される
 国内外の個人または団体に隔年毎に贈られます。**



ブロンズ像「生命のともしび」

第2回「永井隆」平和記念・長崎賞経緯

■候補者推薦依頼先

国公立医科大学、国公立研究所、各都道府県庁及び在日外国大使館等172箇所インターネット(長崎市のホームページ)に登載

■募集期間

平成9年6月2日~8月9日

■受賞者の選考

学識経験者で構成する「永井隆」平和記念・長崎賞選考委員会において選考し、関係各界の有識者で構成する「永井隆」平和記念・長崎賞委員会において決定した。

■賞の内容

正賞 賞状、賞牌(ブロンズ像「生命のともしび」)
 副賞 賞金200万円

■授賞式

日時:平成10年3月3日(火)
 場所:長崎県医師会館

「永井隆」平和記念・長崎賞の応募状況 (件)

区分	個人	団体	合計	国内	国外	受賞者
第1回 H7年度	4	1	5	3	2	秋月 辰一郎 氏
第2回 H9年度	8	-	8	1	7	サイムバルムハノフ氏

受賞者 サイムバルムハノフ氏



受賞者の横顔

1957年から59年にかけて、厳しい旧ソ連軍体制下でのセミパラチンスク核実験被害を、命をかけて、初めて明らかにした中心人物。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(ナシム・NASHIM)や長崎大学医学部と関係も深く、ナシムで出版された「中部カザフスタンにおける環境放射能と住民及び家畜の健康状態」は、初の邦訳本で広くセミパラチンスク問題を史実に忠実に啓蒙する最良の出版物となっています。

また、1993年8月、NHKが、特別報道番組としてセミパラチンスク核問題をとり上げた際にも、最も良心的な医師として同氏が紹介されました。

バルムハノフ氏は、セミパラチンスク核実験による被害の状況についての調査研究において活動した後、放射線生物分野の第一人者としてカザフ医学大会で活躍しています。

また、放射線の医学への応用、とりわけ、癌治療を長年手がけ、臨床と基礎医学の両面から癌治療の研究を推進し、放射線被ばく医療に関する活動は約40年にわたっています。その間に指導した多くの後進が、現在、放射線被ばく医療の分野で活躍しています。

その人格高潔にして、真摯なヒバクシャ医療への取組みは、カザフのみならず、旧ソ連崩壊後の世界反核医師連帯やセイメイネバダ反核運動の中核人物として尊敬されており、今回、第2回「永井隆」平和記念・長崎賞を受賞されました。

467回の恐怖 セミパラチンスク核実験の歴史

- 1942年 米英が核兵器の開発を進めていることが明らかになる
- 1943年 ソ連核開発開始
- 1946年 セミパラチンスク核実験場の設置が決定
- 1949年 8月29日、第一回原爆実験
- 1952年 アメリカがマーシャル諸島で最初の水爆実験に成功
- 1953年 8月12日、セミパラチンスクにて第二回水爆実験が行われる
- 1957年 カザフ科学アカデミー調査隊発足
- 1958年 カザフ科学アカデミー調査隊第二回調査
- 1959年 第三回調査が、モスクワ側との合同調査として行われる
- 1961年 ノーバムゼムリヤ島にて50メガトンの水爆実験
- モスクワ会議において、核実験による住民の放射線被害が否定される
- 1963年 部分的核実験停止条約締結
- 以後、核実験は地下に限定される
- 1965年 チャガン人工湖のための核爆発
- 1985年 ゴルバチョフ書記長就任
- ペレストロイカ政策のスタート
- ソ連、核実験停止を宣言(1987年に再開)
- 1989年 セイメイネバダ反核運動
- 1990年 カザフスタン共和国、主権宣言
- 第11条「共和国領土で核実験の実験は禁止され、科学・細菌・生物兵器などの実験活動も禁止される」
- 1991年 ナザルバエフ大統領が核実験永久禁止の大統領令公布 核実験場閉鎖が決定
- 市民団体による「セミパラチンスク核実験場閉鎖」を記念する国際会議開催
- 1992年 カザフスタン共和国、START(戦略兵器削減条約)議定書に調印

◎セイメイネバダ反核運動

1989年、当時セミパラチンスク州の第一書記であったボスタエフ氏や詩人セイメイネフ氏を中心に行われた、旧ソ連における初めての反核運動であるセミパラチンスク運動と、同時期にアメリカ・ネバダ州の核実験に反対するネバダ運動は、その後互いに連携しあい、「セイメイネバダ運動」と呼ばれた。なお、セイメイとはカザフ語でセミパラチンスクのこと。

New Professor 新任教授紹介!!

長崎大学医学部内科学第一講座 江口勝美 教授



なお、第一内科のホームページをインターネット上に公開しています。江口教授のプロフィール

や第一内科についての情報を見ることができ、ぜひ一度ご覧になってみてください。アドレスは以下の通りです。

http://www.med.nagasaki-u.ac.jp/intmed-1/

NASHIMの発足以来、特にチエルノブイリ関連事業において多大な貢献をしていただきました。長崎大学医学部第一内科の、長瀧重信教授が昨年3月に「退官され(現在「財」放射線影響研究所理事長)、その後任として江口勝美先生(写真)が、昨年12月に就任されました。江口先生は佐賀県出身の53歳。リウマチや膠原病といった自己免疫疾患が専門で、長瀧前教授の下、リウマチや膠原病だけでなく、バセドウ病(甲状腺の機能が亢進する疾患)や橋本病といった自己免疫性の甲状腺疾患、さらには自己免疫異常とHTLV-1という長崎に多いウイルスの関与などについて、素晴らしい研究をなされています。また、研究者としてだけでなく、その温厚な人柄と実直さで、多くの患者さんに親しまれています。

1992年のNASHIM設立以来、第一内科は、旧ソ連邦への専門家派遣や海外からの研修生受入れに尽力され、更に出版事業や啓蒙活動などの分野においても、まさにNASHIM活動の屋台骨を支える存在として協力していただきました。

江口新教授ご自身も、原爆の惨禍の当時、壊滅状態の医科大学学長「角尾晋先生(第一内科「初代教授」)のご意思と伝統を受け継ぎ、21世紀に向けて長崎から世界へと幅広くヒバクシャ医療や医学分野に貢献していきたいとお考えです。これまでも同様、NASHIMの大黒柱として活動していただけています。さらに第一内科は、甲状腺研究分野ではWHO協力センターとして登録されていますので、益々の国際的な活躍が期待されています。

Doctor's Works

核戦争防止国際医師会議(IPPNW) 第1回北アジア会議 長崎で開催

IPPNWは1980年に創立され、純粋に医学的・科学的見地から核兵器廃絶の道程を模索してきました。米ソの核戦争によって地球規模の環境破壊が人類の生存を不可能にすることを科学的に証明、1980年代の米ソの政治指導者に大きな影響を与え、その活動に対し1985年ノーベル平和賞が授与されました。



IPPNWは昨年のポストンでの世界大会で北アジア地域会議の設立を承認、その記念すべき第一回会議が長崎市の原爆資料館ホールで11月22～23日に開催されました。中国、韓国代表に加え、ポストン本部からIPPNW・マッコイ共同会長ほか18名の海外参加者と約120名の国内参加者が出席して、核兵器の廃絶をめぐる諸問題について活発な討議が行われました。

とくに、一般市民への公開講演会では、元外務省原子力課長の金子熊夫氏によるアジアの非核化の具体的な方策の提唱が注目を集めました。原研山下俊一教授のチェルノブイリ・セミパラチンスクの現状についての講演は、参加者にあらためて、核被害の甚大さを認識させるものでした。

北アジアの非核化を目指しての討論では、中国・陸代表の、核兵器の先制非使用の宣言を全ての核兵器保有国に求めることから始めるべきとする積極的な発言が目立ちました。

北朝鮮の代表の参加が直前に取りやめとなったことは残念でしたが、今後も地道な交流を続けて、民間レベルでの核兵器廃絶の機運を高めることに、医師としての使命感をもって邁進することが決議され、閉会しました。本会議は長崎県、長崎市、及びトヨタ財団の後援によって開催されたものです。会場においてはNASHIMの展示を行い、参加者への広報活動が行われました。

Reports 研修レポート

在外被爆者渡日治療の実施

昭和60年より、外務省、厚生省、広島県、長崎県は、共同事業として海外に在住する被爆者の援護を目的とし、被爆地である広島、長崎より、南米在住被爆者巡回医師団を派遣し、南米在住被爆者の検診並びに健康相談を実施してきました。この検診結果により日本での精密検査及び治療を必要とする被爆者を、毎年数名ずつ帰国治療の対象とし、各医療機関で受け入れています。日赤長崎原爆病院でも、この事業に対して、現地への医師の派遣及び在住南米被爆者の精密検査と治療を行ってきました。今年度は、ブラジルより、「星島幸子氏(53歳・女性)」が渡日治療の対象者として来崎しました。

彼女は14歳でブラジルに渡り、日本食レストランを経営、毎年、カーニバルで日本舞踊を踊るのを楽しみにしていましたが、1993年頃より、息切れを感じるようになり、踊れなくなる事もあったそうです。症状が次第に増悪したため、1996年9月、現地の専門病院で心臓カテーテル検査を受け、拡張型心筋症と診断されました。以後、治療を受けましたが、症状が悪化するたびに入院を繰り返しました。1997年10月15日、来崎、日赤長崎原爆病院で受診。来院時、全身倦怠、息切れが強く、心電図、胸部レントゲン、心臓超音波検査にて、心不全と診断され、即日入院、ただちに治療が開始されましたが、他にも、糖尿病、痛風、腎機能障害等の合併症もあり、一時重篤な状態も呈しました。しかし、集中治療により、状態は次第に改善、1997年11月7日、元気に退院しました。彼女は、長年ブラジルに暮らし、現地で検査、治療はうけていましたが、ポルトガル語による症状説明の理解が困難だったため、今回の来崎で初めて詳しく自分の病状を把握できたとの事でした。しばらく日本の家族と過ごした後に、帰国し、ブラジルの主治医の元へ帰っていきました。



原爆被爆者手帳を受け取る星島幸子さん (写真提供:長崎新聞社)

Letter Box

NASHIMへのおたよりコーナー

（長崎から、全国から、そして世界から、毎回たくさんの方々にご参加いただいている公開セミナーや研修会。このおたよりコーナーでは、そんなみなさんからNASHIMへお寄せいただいた温かい激励やメッセージをご紹介します。）



ロシア生まれの私は、 ニュージーランドと長崎で 改めて核の脅威を知りました。

長崎県企画部国際課 国際交流員
ナタリア ロシナ・フッド さん

ニュージーランドから来ましたナタリアと申します。県の国際課で国際交流員として働いています。

ロシアで生まれ、チェルノブイリのことについて色々聞きました。しかし、ロシアに住んでいた時には、情報の不足でチェルノブイリの事について詳しくは知りませんでした。その後、核のないニュージーランドに引っ越してから、核のことについていろいろ知るようになりました。フランスがニュージーランドに近い「ムルロア環礁」で核実験を行った時には、大きな衝撃を受けました。もし核が地球に悪い影響を及ぼさないというのであれば、なぜフランスはパリではなく、ニュージーランドのような遠い所でテストをしたのでしょうか。その後、昨年7月から原爆が落ちた長崎で生活を始めました。NASHIMや通訳の仕事を通じて山下先生に出会い、より、ヒバクシャのことを知るようになりました。

私はニュージーランドに住んでいた時には、核のことを心配することはありませんでした。核がないことはニュージーランドの特徴です。しかし、私の考えでは、旧ソ連政府は、チェルノブイリのヒバクシャの救済や、また同じような事故の再発予防についてはほとんど手を打っていないと思います。

NASHIMが日本のヒバクシャだけではなく、チェルノブイリのヒバクシャのために様々な活動をしていることを知り、心から尊敬しています。

Information

「チェルノブイリ虚々実々」刊行

NASHIMでは今春、モスクワ生物物理学研究所のイリーン所長の著書である「Chernobyl: Myth and Reality (邦題:チェルノブイリ虚々実々)」を日本語訳し、出版することになりました。イリーン氏は、旧ソ連邦の放射線医学最高権威の一人で、チェルノブイリ事故当時にも現場において医療活動を指揮した中心人物です。この本では実際の現場における様々な出来事以外にも、旧ソ連邦の放射線医学の歴史が描かれています。出版時に改めてこの「なしむ」で紹介する予定ですのでご期待ください。

編集後記

おかげさまで「なしむ」第2号では、「永井隆」平和記念・長崎賞の特集を行うことができました。原爆投下後の混乱の中、自らの命をも省みずに被爆者の医療活動を行った永井隆博士の尊い精神が、遠く離れたカザフの地で花開くことを願ってやみません。最近ではサッカー・ワールドカップ予選ですっかり有名になったカザフスタン共和国ですが、旧ソ連邦時代の核開発の秘密都市「クリチャトフ」、「セメイ」など、そしてそこに「ヒバクシャ」が50年近く苦しんでいる現状を、もっと多くの人に知ってもらい支援の輪を広げていきたいと願っています。

DISPLAY

原研(原爆後障害医療研究) 2号館のご案内

長崎大学医学部の玄関を左に見ながら奥へ奥へと歩いて行くと、こじんまりした3階建のビルに辿り着きます。これが原研2号館(長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設2号館)です。旧名称は原爆被災学術資料センターといいます。1階には原爆の医学的影響の展示室があります。世界唯一の被爆医科大学である長崎大学医学部の医学同窓会被爆50周年記念事業のひとつとして造られたものです。原爆直後の急性症状や後障害の主なものがパネルで紹介されています。次の3つの展示品が被爆医科大学の特徴です。

- (1) 故 永井隆博士の救護報告書、
- (2) 故 調来助名誉教授の原爆被災復興日誌、
- (3) 西森一正名誉教授の血染めの白衣です。

展示室は修学旅行生や市内の中学生の平和学習の場となっています。学内よりも学外に有名な2号館です。2階にはコンピュータ室があり、原爆被爆者の健康に関する情報が登録されて



います。これまでの健康診断の検査結果が250万件も蓄積されています。茂里町ハートセンターでの健康診断の際、過去の検査結果をディスプレイに表示して健康指導に活用しています。さて、この2号館には4つの教室が同居しています。まず1階には「国際放射線保健部門」(なしむ1号で紹介されました)と資料収集保存部の「生体材料保存室」があります。2階には資料収集保存部の「資料調査室」が、3階には放射線障害解析部門の「放射線疫学」があります。ミンスク大学からの客員教授や研究生が出入りする中、「おはようございます」「グッドモーニング」「ドゥーブラウトラ」と多彩な挨拶から一日が始まります。